

2 アジア都市社会における文化の再編と生成

ポストコロニアル都市の悲情 —台北の日本語文芸活動について

黃 智 慧

一 はじめに

今年、日本では日本語が未曾有のブームとなっているらしい。店頭では一連の日本語の魅力を再発見しようという書物が次々と出版され、世の中の日本語に対する熱い眼差しが反映されている。その熱い眼差しに一脈通じる人、いやむしろそれ以上に、戦後半世紀経った今もなお日本語に夢中な人々が、我が故里の台北にもいる。

その人たちとは、近年、日本人から「日本語人」という尊い称号を日本人から贈られたことがある¹⁾。『台湾万葉集』に出てきた人たちがその代表的な人物である。民族的、人種的な特性というよりも、ふだんの生活で日本語を語り、また読み書きもできる点が、この「日本語人」の特性であるといえる。しかしだからといって「日本語人」といっては憚りがあるともいわれる。国籍という現代人における大きな分類の枠組みには当てはまらないからであろう。そもそも、この種の「日本語人」はみな日本国籍をもって生まれてきたという白紙に黒字のような搖らぎがたい事実がある。その後この事実は、日本の敗戦によって台湾植民地が放棄されるようになった結果、大きく変わることとなった。しかし、このような大きな政治的な力も、言語や文化のジャンルの前では、その効力に限りがあったようだ。国語、国土、そして国民が三位一体であった時代

は終わりを告げたのであった。高い日本文化の素養を身につけた旧植民地台湾の人々のことを「日本語人」としか名付けようがない状況もこのことを説明している。以来、日本ではなんとなく耳にするようになったが²⁾、厳密な定義づけはまだなされたことがない。というのも、この「日本語人」は、単に言語（日本語）で人の分類をしているものではないからである。もしこの立場から「日本語人」を解すれば、およそ現在の日本国民や海外邦人まで含まれることになるが³⁾もちろん、この称号はそういう意味で認識されているものではない。使用範囲は台湾に限られている。アジアの他の旧植民地では見当たらないという、奇妙な限定版である。そういう意味では、台湾におけるこの「日本語人」の存在は、日本植民地統治の終焉と必然的な関係をもつていてもかかわらず戦後ただちに誕生したわけでもない。20世紀末という日本の統治から50年もの月日が経ってしまった近年に、ようやく彼らが脚光を浴びるようになったことは、ポストコロニアル期の台湾における日本語文芸活動の存在と大きく関わっているのである。しかしこのような称号は、はたして彼ら自身が納得するものであるかということも問わねばならない。

ともかく、定義づけの問題はここでとりあえず保留しておくことにしたい。植民統治が終わった後、当時最大の植民都市であり首府でもある台北市、そしてそこに住んでいた植民される側はどのような運命をたどったのか、日本語の位相はどうなったのか、という問いは、意外にも日本、台湾の双方において、学術的な課題としてなされてこなかった。小論では筆者の2002年後半から参加してきた台北の日本語文芸活動サークルのフィールド調査資料に基づき、いわゆる「日本語人」が丁寧に教えてくれた、彼らの辿ってきたポストコロニアル期の心境を追ってみたい。

二 台北という都市が生まれるまで

長い歴史においてみれば、7000年前から新石器時代の人間が既に台北盆地

で生活を営んでいた。海に近いという点、また川や湖にも恵まれ、古来、黒潮文化、または環東シナ海文明の一つの大いな中継地として、航海民族が行き交わり、ここで優れた先史文化を築いてきた。例えば4000年前の円山遺跡からは工芸の水準の高さ及び複雑な社会組織が伺われる玉器、石器、土器など、大陸の南部沿岸から移入してきたと思われる様々な出土物が見られた。また3000年前の芝山岩遺跡からは、彩陶、織物や大規模な稻作農業が始まられたことが伺われる。そして2000年ほど前の十三行遺跡からは大量の貨幣、ビーズ玉、大陸製の陶磁器が出土したことからも分かるように、台北盆地の先住民達は海路を巧みに利用して周囲の諸民族と交渉を続けてきたのである。そういう遺跡の内容からみて言えることは、どれもその当時最高の華南地方の文明とひけをとらないということである。また十三行遺跡が代表する文化は、通称ケタガラン族という先住民族によって継承されたこともわかった⁴⁾。ついぞ国家体制をもつことのなかったこの島が、國家が作り上げた歴史の舞台に登場させられることとなったのは、400年ほど前のこととなる。

17世紀に至るまでの間、この台湾の島は物産が豊富で、戦略的な位置も重要であるにもかかわらず、いかなる国家の統治をも受けたことがなったというこの事実は意外に思われる。だが、その後は東シナ海海域で貿易活動を行う幾つかの国家によって狙われるようになる。ジャワ島より北上してきたオランダ、ルソン島より北上してきたスペインにより、中継地を獲得するため、台湾の南部と北部はこれら植民帝国によって相次いで占領された。結局、西に位置する大陸から、たびたび起きた天下争いの軋轢の末、やってきた漢民族の部隊によって取って代わられた。この明鄭政権の台湾経営も長くは続かず、間もなく清帝国に敗れ、ようやく17世紀以来の台湾島における動乱に終止符が打たれた。

18世紀以降、大陸の沿海より、福建及び廣東を中心とした、経済のプレッシャーに耐えられなくなった人々が勇んで新天地を求め、険しい道のりにも恐れず、大量に台湾に移民した。この時代、清帝国経営の重心は、台湾南部にあつた。台北盆地への漢人移民はその後徐々に増え、次第に先住民族ケタガラン族と通婚・混血し、その開拓の範囲も淡水河の西側から東側の艋舺（今の萬華）

一帯へと広がった。当時「一府二鹿三艋舺」という俗語があったように台南府、鹿港の後に艋舺は三番目の札を持っていた⁵⁾。

19世紀以後、台湾北部で生産される水稻と樟腦、茶の葉が次第に重要な国際貿易の商品作物となっていき、台北地域の商業の繁栄をもたらした。1860年に淡水、基隆が次々と開港されたほか、清政府はついに行政の中心を台南から台北へと移すことを決定した。1875年より台北の最も繁栄する商業区域である艋舺と大稻埕の間の空き地に、風水原理によって北より南面する設計の台北城建設が計画された。これは最後の厳格な中華風水原理による都市計画であるという。

しかし清国財政の疲弊によって、計画はあっても遅々として起工することはできなかった。とうとう費用は完全に現地の仕紳の寄付によって賄われることとなり、1884年になって完成をみた。周囲の長さは4.5キロメートル、高さは4.5メートルで幅3.6メートルの城壁に囲まれ、城内の施設は行政中心、教育施設、信仰センター等の建築を含み、商業用の市街地等も加え、建物としてすべて赤い瓦の屋根に白い壁の華南式家屋で統一され、相当整っていた。これらは清末の役人が内地よりもひと足先に電灯、郵政、学校⁶⁾、図書館等を導入した、苦心の作であった。だが、わずか10年後に、日清戦争の結果、清朝は台湾を日本に割譲したのであった。

1895年に台北城に兵をもって臨んだ日本植民政府は、巨額の資金を投じて建設された清朝末期の建築を代表する台北城に、利用価値があるとは考えなかった。それに止まらず、意図的に要塞風の城を破壊つくし、別の思考原理に基づいて台北城を造り替えたのだった。

日本植民政府は、1900年から計画的に城壁を撤去し、その城壁跡に広大な道路を建設し、いわゆる「三線道路」を作り上げ、その中に「城内」という日本人界隈を作った⁷⁾。大正時代には、つぎつぎと華麗に高く聳え立つ西洋風建築が建てられ、その中でも最も代表的なのが1919年に完成した台湾総督府の建築である。約60メートルの尖塔は台湾最高の建築であり、植民主が高々と聳え立つ威厳さの象徴と目されていた。この総督府は、周囲を囲まれるように

して「城内」のほぼ真中に位置していた。向きは、もとの南向きが東向きになっていた。この手直しによって、中華帝国伝統に基づく台北城の北より南面の風水を完全に変えてしまったことである。

清国よりひと足早く西洋化を達成した明治日本が、このことを内外に誇示するため、国家機関のあらゆる建築に中華風を取り除き、かつ日本風でもない、西洋風の建物を建てたのである。また「城内」という日本人界隈には栄町、本町、デパート、飲食街など、リトル東京といわれるくらい、清の台北城の拓いた土地の上に植民都市の空間が作り上げられていた。

台北が地域の名称ではなく⁸⁾、一つの都市として発足、即ち台北市政が誕生したのは1920年、植民期においてである⁹⁾。その中で勅仕官の市尹一名を筆頭に職員800名にのぼる市役所の体制が敷かれていた。半数民選、半数は任命の議員組織もあった。1940年当時、定員40名の市会議員のうち15名は台湾人によって占められていた。

都市台北の面積を少し東へ延びたとしても、基本的に艋舺、大稻埕、及び城内という三つの構成がほぼ保たれていた。その中では、民族的な縛りの様相がみられた。つまり、台湾人は依然として艋舺と大稻埕で生活を営み、日本人の城内と混じりあうことはなかった。特に大稻埕は人口も多く、経済的に繁栄しており、ここには台湾人が経営する、文人と芸術家達が集まる洋風サロンや劇場等があった。大正、昭和初期に政治社会改革運動を提唱した「台灣文化協會」や「台灣民衆黨」、「台灣民報」等、新しい文化風潮は、大抵ここで誕生したのである。当時日本の植民地經營の中にあった民族の間の隔たりは、政治地位の上に反映されただけでなく、空間的な区画の上にも反映されたのである。

その後、近代化の誇りとして広く普及した教育機関においては、もともと日本人が小学校へ、台湾人が公学校へ、また一中へは日本人、台湾人は二中か三中へという隔たりがあったものの¹⁰⁾、1922年以降、「共学制」が実施されるようになり、次第に台湾人が試験によって高等教育に躍進するようになった。例えば、もっとも競争率の高い台北帝国大学（1928年設立）医学部の学生数は台湾人と日本人がほぼ半数となった。帝大へ進学できる旧制高校の1930年以降

の学生数の比率は、台湾人と日本人が1対3であったが、これに対し二、三年制の職業学校や中学教育となると、全体数として台湾人のほうが遙かに上回る。また台北に高等教育機関が集中しておかれたが、大学は台北帝国大学一ヶ所しかなかったため、日本の私大に進学する者も少なくなかった。

ともかく、日本帝国による台湾の異民族と土地に対する50年の長きに至る植民地経営は、日本の歴史の中でも実験性の高いものであった。それらの諸々の建設、更には帝国日本の世界戦略の中で、台湾の与えられた配役も含まれ、みなその首邑—台北という植民都市に深い烙印を残した。結果的にみれば、日本植民政府が民族の隔たりを強制的になくさざるを得なかつたのは、二つあつた。一つは中等学校以上の国家教育体制において、二つに、否応なしに台湾も巻き込まれた太平洋戦争においてであった。この二つの体験を経たことによつて、台湾にいた日本人と台湾人には、そのポジションの差異はあっても共有できるもの、いわば記憶の財産がたくさんあつた。しかしそれは敗戦の日を迎えて打ち切られ、両者は袂を分かつこととなつた。その後は両者それぞれの戦後において、当時共有されていた記憶の財産を傾みることにできずに今日に至つているように思える。

三 二つの顔をもつた台北のポストコロニアル風景

台北という都市の規模は、市政が始まった1920年の時期には20万、その後、徐々に増えても、終戦当時には33万人、70平方ヘクタールという、決して人口密度の高い都市ではなかつた。その中の3割弱が日本人で、敗戦とともに全てを放棄し、母国へ引き揚げる運命となつた。まもなくして中華民国の先頭部隊が台湾に入ってきた。以後、大陸の住民たちが中国国内の内戦を逃れるため、次々と台湾へ逃避してきた。1949年までに入ってきたこうした移民（難民）の人口数が、軍隊も入れておよそ200万といわれる。その中にどれくらいの人口を台北市が受け入れたのか、具体的な数字は見られないが¹¹⁾、町の風景とし

て、台北市内に日本人が明け渡した建物がこうした移民の受け入れ施設として充当されていた。台北城内の風景には、空き地の不法占拠や掘建小屋があちらこちらにみられた。日本植民地政府が台北城の城壁を破壊して作った三線道路まで、路面は移民たちによって違法建築が作られた。その数は夥しく、後に1600以上の店舗をもつ八棟の中華商場へ（全長一キロに及ぶ）と作り変えられ、90年代に撤去されるまで大陸各地から来た商人の集う、台北の繁華街の目玉となった。また、台湾人もふだん滅多に行こうとしない日本人共同墓地にまで、新しい移民達によって夥しい違法建築が作られていった。また主に大陸からの軍人、軍属が空地や農地、元軍用地を囲い込んで住むようになった。これを「眷村」という。それは正しく人口爆発の様を呈していたといえる¹²⁾。そして、台北の街道の名前が中国大陸各地の地名へとすりかえられた。例えば、榮町は衡陽路へ、本町は重慶南路へと変身した。大正町、樺山町、児玉町という町名は消え去り、孫文や蒋介石の名前から取った中山路や中正路、また北平街、南京路のような大陸の街道名も目立っていた。そして町のモニュメントとして立てられた銅像も日本人支配者から中華民国の功績者へと建て替えられた。こうした移民の凄まじいなだれ込みは、空間の収奪という社会問題だけでなく、文化的状況においても、論壇で日本の植民統治をめぐる評価の分裂という事態を招いた。

台湾が日本から得たものと失ったものとは何か——、という問い合わせに対して、大陸から渡ってきた国民党政権は既に答えを用意しており、台湾人は日本人によって50年も奴隸化教育をされ続けてきたのだとその損失が決めつけられた。

従って就学率がアジア一高いとして誇られていた日本語による教育が、植民後はまったくの負の遺産となってしまった。より教養の高い日本語の修得に専念した者ほど、戦後、疾風怒濤のようにやってきた北京語の大海上で孤島となり、文盲となった。そこで北京語によって宣伝されていた、日本によって植民された人は国民としての欠陥がある、だからわれわれに統治されても仕がないんだという理屈に対し、台湾人も懸命に反論していたが、日本語によってしか書くことのできなかった台湾人の弁明は、ついに新しい支配者に聞き入れ

てもらえなかった。1946年10月にはついに日本語禁止令が出された。ますます両者の対峙が緊張してゆく中、翌年に台湾人の知識人が大量に虐殺されるという二二八事件が起きた。その後、白色テロという、厳しい思想統制の時代が続くこととなり、日本教育をうけた台湾人は長いあいだ声を出せずにいた。当時の状況について、後になって台北俳句会を結成した黃靈芝（後述）が次のように述懐している。

テレビで作家の小田実氏が警世の言を吐いておられた。「日本は敗戦によりゼロから再出発したが、韓国は一旦小数点以下まで落ちてから這い上がった」。この点、台湾人はもっと惨めである。昭和二十年なる年号が民国三十四年だと呼びかえられた日から、人々は忽ち啞となり聾となり盲となつた。何しろ当時、政府の係員が戸別訪問をして台湾人の学の水準を調査したが、私の戸籍簿の教育程度欄には「不識字」（字を知らず）と書かれてしまった。中学で習った漢文など全然役に立たなかつたのである。（中略）。文盲には字は書けなかつたし、迂闊に日本文を書くと思想を疑われてしまいがちだつた。¹³⁾

そして、1949年、中華民国が正式に台湾で再出発をし、台北を臨時首都と定めたのである。日本時代の城内という日本人界隈に大陸からの中華民国政府がすっぽりと入り込むこととなつた。例えば銀行や裁判所は建物をそのまま利用することができても、植民都市の体制に無かつた行政院、立法院や監察院のような国家としての中央の権力機関は行き場が無かつたため、それぞれ台北市役所、第二女子高校、台北州庁などの建築物の中に入り込んだ。日本の植民地支配の最大の象徴であった台灣總督府には、接収にきた長官公署がまず入り、1949年の後、中華民国の大統領府がまるごと入ってきた。

この時期から台北という都市が2つの顔を同時に持つという世界に類を見ないポストコロニアル風景を持つこととなつた。一つには敗戦国日本の植民都市という顔であり、そのような都市は山積みされた戦後処理の問題を抱え込んで

いる姿である。もう一つは、戦勝國中華民国の首都であり、勝利の栄光を称え、また大陸へ政権を取り戻すための臨時拠点となつた。後者においては、その目的を達成するべき効率を高めるために戒厳令が敷かれることとなつた。戒厳令の下に選挙権はもちろん、集会、結社、出版など、表現の自由が奪われた。この状況は、台湾人の目に日本の植民地統治となんら変わることのない新たなる植民政権として映つた。そしてその戒厳令が1987年まで続き、38年に及ぶという世界最長記録となつた。

その間、敗戦処理や植民後処理は置き去りにされ、「戦勝国首都」の顔が「敗戦国植民都市」の顔を覆っていたのである。それは空間的変化、つまり建築の中身、街道の名称、銅像や記念碑などに見られる変更に止まらず、時間的次元においてもまた象徴的に表れている。もっとも大きな象徴としての時間、すなわち八月十五日という敗戦、或いは終戦の日は、台湾ではあたかも何もなかったかのように、平常な一日としてみなされている。しかし十月二十五日の中華民国政府が接収して入ってきたに日は、「光復節」という、国定祝日となり、国家や地方政府で大きな記念行事や祝賀の催しが開かれる。こうした記憶装置としての空間や時間が塗り替えられたことに対し、その激動の時代を歩んできた人々にとって、頭から記憶が抹消される筈はなかった。それが公式の場において、表現の自由が奪われたため、最後の手段として日本語で、しかも目立たない、暗喩や隠喩が多く用いられる日本語の詩文に「植民される者」としての心情を寄せていたのである。

四 「台北」の名を冠した日本語文芸サークルの成立

日本の近代の短歌、俳句と川柳の文学運動は明治中期以後に盛んになったが、これはちょうど日本植民主義が台湾に進入した時期と重なる。このため、近代日本の国家教育の底で、これらの日本語詩は、国語教育の中で一定の分量を占めていた。この時期の国語教育は、植民地におけるものと日本内地のと非常に

類似していたため、この世代の台湾人は同じ世代の日本人と頗る類似の日本語詩歌の素養を備えることを示しているのである。

1946年10月、台湾における日本語形式の創作出版活動が禁止された後、20年を隔てた1968年に至って、彼らが再び日本語による詩の文芸サークルを始めたのも、文芸作家になることを志してのものではない。台湾のこれらの日本語詩のサークルの作者達は、すべて戦前の学校教育の中で、また彼等の人生の青年期の中において、これらの文学形式に接触したが故に、これらの詩を作る能力が備わったのである。それゆえに、彼等は短歌、俳句、川柳の文学形式に吸引され、今に至るまで30年の久しきにわたって続けることができた。それには必ずその他の要素がある。ここで最も歴史の長い「台北歌壇」、「台北俳句会」、「台北川柳会」の成立経緯について説明してみたい。

「台北歌壇」を創立し、並びにその会長を30年余り務めたのは呉建堂である。彼は1926年、台北市に生まれ、1999年に亡くなった。ペンネームは孤蓬万里という。台北二中、台北高校を卒業した後、台北帝国大学医学部に入学し、戦争期間には高雄海軍医院に派遣されて勤務した。終戦後、改制された後の台湾大学医学院を卒業した。彼は台湾各地の公立病院院長を歴任し、余暇としては他に剣道もたしなみ、八段の資格がある。旧制台北高校にて勉強していた時、日本の教師、犬養孝が講義していた『万葉集』に啓発を受け、和歌に対して興味を持ち始める。その才華は深く認められたが、その後、戦乱という社会状況、そして医者という職業に従事したため、創作の楽しみに戻ることができなかつた。1960年代に至ってから、日本に帰国した昔の同窓との連絡が増加し、平素作った和歌を日本の詩のサークルに投稿するようになった。どれもなかなかの反響を得た。

1965年、台大附属医専を卒業した呉振蘭は、和歌における日本最高の「宮中新年歌会」に投稿し、3万5千強首の専門家の作品の中から、11首の一つに選ばれた。これは1860年以来、100年の歴史がある日本宫廷歌会において、有史以来二人目の外国人の作品の入選である。このニュースが台湾に伝えられた後、平素から日本詩サークルに投稿していた幾人かの台湾人にとって、内心

大きく鼓舞された。1968年、吳建堂がリーダーとなって、30余名の有志者と連絡をとり、前述の吳振蘭を顧問として、遂に「台北歌壇」を発起した。実際にはその成員は台北市内の者に限らなかったが、「台湾」の二字を上に冠した集会は当局によって政治的な傾向の標号と看なされたため、そのため「台北歌壇」と称したのである¹⁴⁾。吳建堂はこれより以前日本の国土を踏んだことは無かった。

「歌壇」に少々遅れて、1970年に結成成立した「台北俳句会」の会長黃靈芝は、1928年に生まれ、彼も目下のところ、未だかつて日本の国土を踏んだことは無い。2002年、国江春青のペンネームで、日本で出版した短篇小説集『宋王之印』は、日本文芸界を驚かせた¹⁵⁾。

黃靈芝は俳号であり、本名は黃天驥という。台南に生まれ、太平洋戦争が始まった1931年、彼は中学に入学し、学校教育をわずか中学三年まで受けたところで戦争終結を迎えた。その生涯は著作を志業とし、今に至るまで自費出版の『黃靈芝作品集』19巻がある。また彫刻や古美術の収藏を愛好している。その述懐によれば、「台北俳句会」の発起は、日本作家たちが来台した時、黃靈芝の背中を押した結果だという。戦後の一時期、彼と一群の文芸同好者はかつて『軍民導報』の文芸欄の上で日本語文をもって投稿したことがあったが、まもなく去った。後に彼は「台北歌壇」に加わり、2年後に「俳句会」を発起した。

初期の「歌壇」と「俳句会」、常々諜報人員に目をつけられる危険に晒されていた。俳句会の前に「台北」をかぶせたその理由は「歌壇」と同じで、中国は正統であって、「中国俳句会」なら認められるが、「台湾」の二字はタブーを犯すことになるからである。その成員たちは実際には台湾各地から来ており、職業類別もさまざまであった。男性では医者、教師、牧師、画家、弁護士、会社社長、サラリーマン、公務員、教授、校長、学生など；女性では家庭の主婦、教師、クラブのママさん、尼さん、生け花教師、塾の主任、幼稚園園長などがいる。

黃靈芝は、当時を振り返り、毎月俳句の例会において、周囲から度々「君は

今に撃まる」「必ず撃まる」等警告されたと述懐している。彼は毎回袋の中に一通りの短刀を入れておき、萬一人が乱入してきた時、会員を保護する決心をしていた。幸いにも、この様な事は實際には発生しなかった。ただし、この一群の人が日本語詩文を創作している時、當時ある知名度の高い文芸評論家が黃靈芝を貶して「日本人の糞を食べて生きている男だ」と批評していたのを彼は知っていた。¹⁶⁾

他人の嘲りや不理解に対し、黃靈芝は次のように書いている：

われわれ一群の外国人が、日本人と何ら変わりのない純粹な日本語で（時には日本人以上に純粹な日本語で）短歌や俳句をつくったりすると多くの人はまず目を瞠いてびっくりする。そして——大抵はそれでお仕舞いである。

つまり、われわれの作品は作品として取り上げられる前に、単なる「日本趣味」として片づけられてしまいがちなのである。事すでに「趣味」であるからには、とても本場物にはかなわない、という先入意識が誰の胸にもあるからであろう。このことは、日本人のつくる漢詩の場合と二様はない。

ところが、日本画の場合はどうだろうか。日本画は隋、唐時代に中国よりその技法が伝えられ、それ以前よりあった原始絵画と接触した、変貌し、日本という風土の中に根を下ろし、今日見られるような日本画となったものである。すなわち、伝来当初は単なる中国趣味として持て囃されたものではあったろうが、現在では日本画を単なる中国趣味として考える人はおそらく一人もいないはずである。（中略）中国の国樂はすでに胡人の音楽ではなくなっている。（中略）

少なくともわれわれは九官鳥のように他人の声音を真似るよりは、地声で己の歌をうたった方が、その道の玄人には快く耳に響くことを知るべきであろう。台灣という風土の中に生息しているわれわれが、いたずらに吉野桜や盆踊りに見惚れ、刺身や蒲焼きをのみ食べたがったとした

ら、折角、台湾に住んでいる意義がなくなろうというものである¹⁷⁾

上述の文中より分かることは、これら詩の会の構成員は、日本人のまねをしようとせず、自分が置かれている台湾の自然と人文を相當に意識していることである。したがってその作品の中に、かなり多くの台湾の景物主題を読み込んでいる。その結果として、現在「台北俳句会」のメンバーが独自の『台湾歳時記』という大著をこなしている。総じていえば、彼らは専業作家を目指すこともなく、端に青春の時期に身についた言葉のリズム感覚をしっかりとつかんでいたため、たやすくこの道に入れたのである。一例を挙げれば、

指を折り短歌詠み居れば忘れ居し大和言葉が次々と湧く

(高秀、孤蓬万里 1994:37)

ただ手の指を折り曲げることで五、七、五、七、七の字数を計算することで、久しく使用しておらず、ほとんど忘れていた日本語がとても自然に、すぐ一つ一つ頭の中に浮き現われるということである。また、

日本人に幼き日より伍し来たり短歌作ること日記にひとし

(呉建堂、孤蓬万里 1995:24)

日本人にありしは二十年短歌詠むは五十年を越す死ぬまで詠まむ

(呉建堂、孤蓬万里 1995:24)

短歌を詠むことは彼等にとっては、まるで日記を書くことと同じであり、自己のライフ・ヒストリーを記録することである。呉建堂にとって日本人であったのはわずか20年の間だけだったが、この日記は50年を超えて続き、生命の終わるその日までずっと蓄積していくことが可能なのである。

彼らが挙げる、どうして自分が日本語の詩を作り始めたのか、という理由については、日記を書くことに当てるということの外、青春時代への郷愁という

人もあり、老人ボケの防止のためだという人もいる。また頭をはっきりさせるためだという場合や友達に引っぱってこられて始めて接触をはじめたというケースもある。これらをまとめれば、会員たちは台湾で生まれた台湾人であるが、一部は台湾で生まれた日本人、日本生まれの日本人、日本生まれの台湾人、及びアメリカに住む台湾人らによって構成されており、その理由、縁は多種多様である。

最後に成立した「台北川柳会」は、1994年に至って七人が集まって設立を決定した。前述の吳建堂及び黃靈芝もこの中のメンバーの一人であり、彼らは賴天河を主宰者として推挙した。後に改めて李琢玉が会長を担当した。李琢玉は1926年生まれ、本名は李珵璋という。その知識は淵博で、周囲から生き字引と目されており、日本の柳壇でたびたび大賞を取る腕をもつ。2002年11月に百回の記念をもって会名を「台北」から「台灣川柳会」の名称に変えた。これは会員の念願であり、また時代も李登輝執政下になってから「台灣」という名前がタブーでなくなったらかである。目下のところ最も早く発起した七人の中で、なお三人が会の中におり、会員数もまた40余人まで増加した。その中の半分は日本に住む日本人で、毎月投稿し、月会には出席しない。川柳の性質は辛辣に人や物事を批判できるため、台、日二地で発生した時事は常に作品の中に現れる。両地の会員たちはこれによって情報交換している。五、七、五、全部で十七字の短かい表現の中で、相手の情報或いは社会文化現象を理解することは、決して容易な事ではない。たとえ日本文を理解できる日本側の会員でさえも、しばしば台湾川柳の内容を理解できないことがある。この部分は次節にて詳しく論じる。

五 重い訛りとは、翻訳の問題にあらず

台湾の日本語詩作の理解にとって、真の困難さとは翻訳にあるのではない。以下の川柳、或いは俳句とは、台湾の季節と事物を詠んだものである。たとえ

完全に日本語を理解できたとしても、台湾に生活していなければ、いったい以下の素晴らしい句が理解できるであろうか：

小籠包最後の一つ譲り合ひ（周月坡，《俳句集》28：36）

龍眼を供へて祈る多子多孫（周月坡，《俳句集》28：37）

カレンダーを換へるだけなり新正月（林希施，《俳句集》28：42）

中元を千斤豚の満足げ（林希施，《俳句集》28：43）

新正や多国語家族一堂に（陳錫恭，《俳句集》28：76）

屋上に補冬を嘲ふ紅面鴨（傅彩澄，《俳句集》28：83）

肩ぶつけ合うても笑顔媽祖祭（羅慶兆，《俳句集》28：137）

淡水に落ちる夏陽や金銀波（陳火桐，《八月句会》，2002）

鳳眼果核の處理場を見下ろして（李琢玉，《九月句会》，2002）

「母老虎」とふ言葉しみじみ残暑かな（林美，《九月句会》，2002）

肉鯽仔挺身隊の頃恋し（李秀惠，《十二月句会》，2002）

油条もぐんにやり曲がる今朝の雨

（張繼昭，《会報》52，主題：「曲がる」）

米粉が好きで新竹をも畳廻（陳火桐，《会報》53，主題：「自由詠」）

老い耄れを LKK と台湾語（陳清波，《会報》74，主題：「自由詠」）

最後の一つのようなタイプは、日本語が分かる者であっても理解できない。例に中文に訳したものを、中文が分かる者がみても、やはり理解できるとは限らない短詩である。その中に台湾語の発音する「ラウコッコ」の音のイニシャルを取って「エルケイケイ」にしたのである。この LKK は最近の台湾社会の流行語になっているので詠まれたのである。また、もうひとつ台湾特有のポストコロニアル心理を表現する詩も日本人には理解しがたい。例えば次のような句がある：

日本語を本気でしゃべる終戦後

(高瘦叟, 《会報》100, 主題: 「本気」)

この一句は、台湾の被植民者の植民前後と日本語の離合関係をよく表現した重要な傑作であると筆者は考えている。この川柳が詠まれる会には、日本から一人の大手新聞社のベテラン文芸班記者が取材に来ていた。日本語詩作にもまた非常に造詣が深い彼ではあったが、ただしこの句の詩の意味がどうしても分からぬと言っていた。しかし思わぬことに、その場の70歳以上の会員はうなずきあって、私たちみなこの句の意味が分っているし、また同様の心境であると語った。

この短詩は、台湾のポスト・コロニアルの抵抗の類型を言い尽くしている。また即ち、日本植民時期において、日本統治に対する反感を表明するために、彼等は内心から真面目に日本語を磨こうとはしなかった。たとえ日常的に日本語を口にしていたとしても、統治者に表向きのみ迎合しているだけであった。しかし、日本統治が終結した後に至り、新しく来た統治者による日本語の圧迫によって、彼らは逆に真面目に日文を磨き始めたのであった。友人との間で日本語をもって話し始めたのであった。新來の統治者（国民党）は聞いても分からぬからである。同時に、日本語の能力も更に熟練度が加わり、日本人と比べても全く遜色がなくなった。これもまた一つの快さを覚えることであった。

この種の特殊な統治者へ抵抗する心理、および被植民の傷あとを克服する方法とは、台湾社会特有の状況である。筆者は過去において先住民の高砂義勇隊の証言を分析した際、これを二重植民後の抵抗の型態であるという結論を得た。¹⁸⁾つまり、前の植民者から得たものをもって、後に来た植民者に抵抗するという心理的な転折である。なぜなら、台湾人の主体性は、今、目の前に来ている統治者に圧迫されつつあるのである。それを訴えるには熟練した日本語でしかなかったのであるが、しかしそれは短直に日本人のアイデンティティをもつということとは大差がある。

以下の短い詩もまた、似たような抵抗と転折の心境を表明したものである。

台湾に中国がある摩訶不思議

(陳鳳儀, 『会報』29, 主題: 「わからない」)

半百の飼育の恩を知らぬブタ (周耀銓, 『会報』90, 主題「恩」)

台湾に中華という化けの皮 (陳清波, 『会報』91, 主題「皮」)

中華民国万罪が本音です (鄭財福, 『会報』98, 主題: 「自由詠」)

双十をふたつのペケと解釈す (鄭財福, 『会報』100, 主題: 「自由詠」)

そして遠い昔の植民者 (日本) に対しては、今、目の前に圧迫がなくなっているので、残ったものは怨み辛みもあり、また良き昔の追憶の心境もうかがえる。

植民日の面影は正座する我の姿勢に今も残れり

(黃得龍, 『孤蓬万里編』1995: 376)

兵の日は反日なれど短歌を詠む今は親日の我の不思議さ

(黃得龍, 『孤蓬万里編』1995: 377)

天皇を神と思ひし彼の日びを空虚なりしと我は思わず

(鄭壻耀, 『孤蓬万里編』1994: 105)

御名御璽に鼻をすすりし日を追へば日本人たりしわが少年期

(傅彩澄, 『台北歌壇』108: 28)

しかしながら、台湾の人のふところの広さと底明るさが根底に流れつつ、時間が経つにつれ、昔の良し悪しは透明感のようなものに見えてくるという、次はその代表的なものである。

ニッポンという愛憎に揺れるクニ

(李琢玉, 『会報』85, 主題: 「揺れる」)

恩讐は御破算にして故侶日本 (李琢玉, 『会報』90, 主題: 「恩」)

日の丸の酸っぱさを知る植民地

(李琢玉, 《川柳マガジン》二月号, 主題: 「日の丸」)

六 空前絶後の一世代の禁じえない悲しみ

台湾の日本語詩の会の作品の中で、もう一つの明らかな特色とは、詩の中でしきりに訴える深く濃い悲しみである。これが例えば日本で最初に出版された『台湾万葉集』の中の第一節のタイトル「悲しきさだめ——自序に代えて」に表れており、また続編の第一節のタイトル「世界の孤児」にも表れている。この種の憂鬱な感情は、さらに幾つかの主題へと分けることができる、以下は筆者が多くの歌の作品の中から一部抜粋したものである：

(一) 国籍が翻弄される悲哀

勝利者の便宜によりて台湾人日本人になりまた中国人に

(吳建堂, 孤蓬万里編 1995: 229)

父祖以来幾度變はる国籍か子孫の未來思いやらるる

(文錫煙, 孤蓬万里 1997: 312)

やれ日本人やれ中国人と翻弄され何時しか我も六十路に入りぬ

(文錫煙, 孤蓬万里 1997: 312)

世界孤児に追い込まれる悲憤に堪へ生き継がむとす千余万の民

(顏梅, 孤蓬万里 1995: 31)

清朝に売られ日本にも捨てられて孤児の宿命を台湾甘受す

(羅坤松, 《会報》1992: 43)

極東の要衝の島蓮萊を世界の孤児になせしや誰ぞや

(吳建堂, 孤蓬万里 1997: 21)

宿命かフォルモサの民一生に三度の国籍更ふるもありて

(吳建堂, 孤蓬万里 1994: 24)

(二) 誤解される悲しみ

以下は戦後大陸から移ってきた、いわゆる外省人によって誤解され、または疎外される悲しみである：

日本式礼儀作法にこだはれば「日本鬼（ヤップンクイ）」かと訝られたる

(王進益, 孤蓬万里 1997: 271)

口づさむ侵略日本の歌聞かれ奴隸根性とあなどられたる

(王進益, 孤蓬万里 1997: 271)

日本語を語る者なきこの国に尚も短歌を作る馬鹿あり

(巫永福, 孤蓬万里 1995: 103)

一世紀口を縫はれし台湾人日本と蔣氏の軍事独裁に

(藩達仁, 『台北歌壇』 1992: 40)

(三) 世代間でコミュニケーションできない悲しみ

吾は日本語妻は台湾語子と孫はチャイナで話す国際家庭

(黃華沼, 孤蓬万里 1997: 322)

「漢詩集」多くを父の残せども我は馴染めず短歌を詠むなり

(黃華沼, 孤蓬万里 1997: 316)

一生かけ培ひ来にし日本語を異国語として子や孫に教ふ

(顏梅, 孤蓬万里 1995: 33)

世代ごと国語の違ふわが家庭歴史のままに断絶に慣る

(顏梅, 孤蓬万里 1995: 33)

台湾語を知らぬ孫たち爺婆と交わす言葉は父母が訳して

(李聰火, 孤蓬万里 1994: 301)

日本語を知らぬ孫にもネンコロリ (李琢玉, 『会報』 99)

(四) 世代間で伝承できない悲しみ

彼等は常々作品の中で自嘲する。前に古人無く、後に来る者無き一代であると。

子孫らとあれど異質の国に住むこの孤独感我のみのもの

(顏悔, 孤蓬万里 1995: 33)

子も孫も日本語知らず特選に入りしわが短歌誰に残さむ

(文錫煙, 孤蓬万里 1997: 313)

短歌とふをいのちのかぎり詠みつかむ異国の文芸と人笑うとも

(吳建堂, 孤蓬万里 1994: 10)

日本語のすでに滅びし国に住み短歌詠み継げるや人や幾人

(吳建堂, 孤蓬万里 1994: 9)

歌とふは我一代のすさびなり繼ぐ人なきに今日をいそしむ

(王重坤, 孤蓬万里 1995: 14)

息子には分からぬ日本の短歌なれど黃家に残さむ我の歌集を

(黃得龍, 孤蓬万里 1994: 290)

悲しかり化外の民の如き身を異国の短歌に憑かれて詠むは

(傅彩澄, 孤蓬万里 1995: 14)

以上の例から示されるように、彼らの鬱憤は出口のない台湾社会の中で、暗流のごとくひっそりと流れ続ける。彼らの心境は今まであまりにも理解されなかつたため、作品から深い悲しみが顕著に表れる。それを煎じ詰めてみれば、台湾のポストコロニアル社会においては、「被植民者」の不理解の原因とは、「理解しようしない」であったり、或いはまた「理解不能」であったりする。この二つの原因は表裏一体のものである。またこの種の「不理解」は、「被植民者」をとりまく、最も近接した三つのエスニック・グループとの関係のあり方からもたされている。

一つ目のエスニックグループは、大陸の中華民国からやってきた移民である。彼らは1945年以後の台湾社会文化発展を主導する優勢さを持ち、日本に対して「戦勝国」と「被侵略者」の立場に立っており、「被植民者」を理解しようという意思を表したことは全くないといえる。事実上、たとえその意思がある人であっても、理解するための能力と経験的な背景を備えることは難しい。また、現実には、日本語を用いたり、日本びいきの言論を発すると、「漢奸」、「日本鬼」、「媚日」などのレッテルを貼られることがある。こういった名称は本来中国大陸において、日中戦争の敵対状況の中で、内部の異議者、つまり裏切り者に対して指弾する言葉であったが、そのまま台湾に持ち込んで「被植民者」にのしかかることとなった。

もう一つのグループは、敗戦によって帰国させられた日本植民者側からである。彼らは、1945年以前の台湾社会文化発展を主導する優勢さをもっていた。ただし彼らは日本に帰った後、台湾に対する発言権を持つことは二度と無かつた。1972年以後は、ついに台湾との国交を断ち切り、公式に台湾は中国の一部であるとの姿勢を固持し、台湾社会への関心は冷ややかである。十九世紀以来の全世界の植民国の社会において、日本自身の「ポストコロニアル」社会コンテキストの変化も特殊な情況にある。しかし元植民主日本は過去の「植民される側」との間に時間・空間的条件の制限はあっても、言語上は深刻な壁はない。問題は歴史教育、国際教育にあるかもしれないが、小文ではその問題に深入りすることはできない。だだしこのような「不理解」を裏付けるために、以下に二つの例を挙げたいと思う。一つは台湾に三十年以上来ている文化人類学者の告白から伺える。1926年生まれの鈴木満男は前述した呉建堂や李琢玉と同年代である。にもかかわらず彼が1969年に初めて訪台した時に「大部分の日本人と同様に、私は台湾の実情を知らなかったのである。台湾と中国とはまったく別の国、台湾人と中国人とがまったく異なる人々であることが、どうやらサッパリ頭に入っていたいなかった様子だ。」(鈴木満男 2001:126)

しかし彼は台湾で長くフィールドワークした後、台湾人のたどった苦難の道に深い同情と自省をしめした。他の若者の事例として1968年生まれの森宣雄

が近著で書いたように、戦後日本の思想界の台湾に対する抑圧や誤認を厳しく批判した。しかし森氏が台湾における脱植民化のディスコースを反省する研究を論拠としている研究者とは、大陸移民（外省人）によるディスコースが潜んでおり、台湾人（本省人）の立場に根ざしていない。こうした研究には研究者は日本語文献を理解できず、視野の点でも方法論上でも大きな疑問が残る。にもかかわらず、日本では軽く見過ごされる。これもまた台湾の複雑な植民後のエスニック現状が日本にとって理解困難なものであることを示している。

三つ目に、もっとも「被植民者」の心を痛めるのは、彼ら自身の子孫の世代からの「不理解」である。同じ一つの屋根の下で家庭生活を営なみ、かつ密接不可分な血縁関係をもっているにもかかわらず、父祖の言語は、子孫だったとしても言葉の深い溝と警戒心とがあり、自然な伝承ができないのである。筆者の出自もこのグループに属する。親はわずか2年しか日本教育を受けなかったので、家庭内では台湾語のみであった。しかし古稀祝いの宴に無学の祖父が唯一歌ったのは日本軍歌だったことに驚愕した。それまでに学校で北京語教育は反日教育を受けた者として、祖父の日本時代の経験が如何なものであったことに興味を持つこともなかった。だが、生活の中で、隣の病院の医者や大学の教師、また親戚の中の年配者が数人集うと、ぼそぼそと聞いても分からぬ日本語でしゃべっている光景は何度も目にした。そして彼らの身振りや思考様式も一向に難解なものであった。例えば、次の歌に示されているように、

念願のビル建て終えて額入りの大坂城に部屋輝かす

（傅彩澄、『台北歌壇』108：28）

夫婦鶴舞ふ絵の前に威儀正す古稀の記念と孫らカメラに

（林禎慧、『台北歌壇』105：18）

異つ国となりて久しきこの島に味噌をなめつつ沢庵かじる

（葉金蓮、孤蓬万里 1994：332）

彼らが普段いかに日本文化漬けの生活をしているかが分かる。しかし、筆者

の世代からみて、一群のエイリアンのごとく目に映ったのであった。勿論、こうした現象は、個人や家庭によって多少の差があることはいうまでもない。

また台湾社会内部における、異なるエスニック・グループによつても、それぞれ言語断絶の状況の程度差もある。台湾の被植民者は、先住民と漢族の二大エスニックグループに分けることができる。漢族の中ではまた閩南語系と客家語系に分かれているが、この両者の間は日本語の世代間の伝承の状況は違ひはない。本文で引用されている作者の中でも客家人出身者は少なくない。ただし先住民と漢族の両者を対比すれば、父祖の言語の評価が伝承を左右しうることがわかる。

先住民の社会において、日本語の価値は比較的に高い。このことは筆者が十数年来、台湾先住民社会でフィールドワークした結果分かったことであり、また台湾で長くパイワン族のフィールドワークをしている文化人類学者松澤員子の観察からも裏付けられる。松澤は以下のように指摘する。「戦後30年以上過ぎ、日本語に代わって中国語（北京語）が国語として教育されていてもかかわらず、1970年代にはまだどこのパイワンの村を訪れても、四〇歳代から六〇歳代の人びとは流暢な日本語を話すことができた。その後、中国語教育とテレビの普及によって、若者だけでなく年配者の間でも日本語が衰退した。そして、九〇年代に入ると、日本からのテレビ放送の受信や日本への観光旅行の機会の増加によって、再び日本語復活の傾向にある」（松澤 1994：338）。そして、「筆者がフィールドワークを始めた頃、日本語を話せない二〇代、三〇代の男性がカタカナを書くことができることを知って驚いた」（松澤 1994：338-339）という。日本植民期の教育を受けたことがない世代、或いは植民が終結した後まもなく出生した世代でも、ある程度の日本語を使用することができている。読み書きの力は少々弱いが、そもそも無文字だった民族の彼らには、読み書きの必要はない。また、重要な村の会議の場合、或いは異なる部族が集まった会議の場においてはしばしば日本語が公式言語となる。この種の情景は90年代にいたってもしばしば見受けられた。これは北京語の浸透は漢民族と比較して難しいという状況の中、言語間の力関係と競争による日本語の伝承状況の差異

であった。

他方これに比して、漢人においては、日本語は私人の集会の時にのみ使用する言語となっている。或いは同世代の夫妻と親しい友達とが会話する際に使用されるものであり、公共的な場面では完全に消失した。

事実上、上述した台湾の「被植民者」は、みな多重言語使用者である。前に挙げた多くの作品からも、彼らの家庭が一種の多（国）言語家庭の状態であることが見出せる。夫妻の間では日本語を用い、父子の間では台湾語を用い、祖孫の間では子女が中に入って翻訳しなければならない。そして決まって子孫の世代からみた父祖の世代とは、社会の中でも拙い北京語しか表現できない変哲者であるということになる。このような状況の下、時代を通じて精通する言語は存在せず、貴い人生経験は如何に伝承されるのであろうか？深い文学、思想は如何に続していくのであろうか？この問題は単なる言語上の問題とはいえない。

言語価値の凋落が生み出したのは、ある世代人の全面否定であり、誤解や侮蔑であった。父祖（「被（日本）植民者」）の言語を「侵略者」の言語であるとみなすことは、再度の「被（中国）植民」の結果として生みだされた心理状態であった。

七 結び：何時から誰にとってのポストコロニアル？

今日の台北市は、人口 260 万人、面積 271 平方キロをもち、終戦当時の数倍に拡大している。戦後しばらくの間、市民による民主選挙はあったものの、1967 年から 1993 年までの長い間は国民党執政下で官選市長であった。1994 年によようやく民主選挙に戻り、1999 年末に市政府の組織に文化局がはじめて設立された。初任の局長、龍應台は元文学者であり、就任して以来、その施政方針は外省人に傾きがちであるとして、特に二二八記念館の人事のことでは、しばしば非難を受けてきた。この非難に対して当の本人は、自らが外省人という

一種の「原罪」をもっていることからくる言いがかりであると不満を漏らしている（蔡惠萍 2002：166）。だがその施政を見ると、3年続けて催されている台北文化フェスティバルの目玉とされる「台北詩歌フェスティバル」には、本稿で述べてきた長い歴史をもった日本語詩文芸サークルの名は全く現れない。また龍應台は二十世紀の歴史上、もっとも重要な二つの出来事とは、1949年の中国の分裂と1989年のベルリンの壁の崩壊だと言っている。前者について「我々の世代及び我々の次の世代の運命を定めたから」（蔡惠萍 2002：225）であるという理由を挙げている。このような発言からもわかるように、外省人の末裔は、1945年8月の植民地の終焉及び終戦の意味を、どうやら1949年に中国大陸から移ってきたことよりも軽くみているようである。筆者はここで外省人を出自によって差別視したいのではない。そのような価値観は外省人という出自によって、その家庭や社会などの環境の中で育くまれたものであり、自覚しがたい盲点が存在するということを指摘しているのである。

同様のことは植民史から台北の建築を検討する夏铸九の論文にも、また台湾の南進政策を論じる陳光興の論文にも言える。前者は台北市の脱殖民地化の不十分さを指摘しながら、植民主義の定義づけには、他の国家領土の占領としている¹⁹⁾。そのような視点によって、戦後やってきた大陸の中華民国政権の進入が、いかに台北という都市の空間に変化をもたらしたのかという点について言及もしなかった。また、日本教育を受けたエリート階層の人々には、アイデンティティの倒錯がみられ、さらに台湾社会内部の階層圧迫に加担したといつている。陳光興も台湾の南進政策の改革に、政治的意図が全くもたないにもかかわらず、台湾の発想は戦前の日本帝国の模倣だと非難している²⁰⁾。この両者の研究には、外省人が戦後初期台湾にやってきた当時から尾を引いている、日本語教育を受けた台湾人への不信感や、日本人の奴隸であるというステレオタイプ、どうせ日本人のまねごとしかできないというような視線から脱却していないように思える。そして戦後の大陸政権による中国化の言語、文化、社会政策が台湾社会に劇的な変化をもたらしたことについて、あまりにも無神経に当然視してきた。

ここで、一つの重要な基本問題へ戻りたい。台湾における「ポストコロニアル」はいったい何時からの「ポストコロニアル」を指しているのか？ また誰にとっての「ポストコロニアル」であると呼んでいるのか？ 1945年以降の時期を全て「ポストコロニアル」と呼んでしまうのは、曖昧な言い方である。

日本植民後の時点では主体性をもったポストコロニアル反省は台湾人にとってはたして実現可能であったか。むしろ、前述してきたように彼らは国民党政権が敷いた戒厳令の下で、言論の自由はもてなかつた。やがて戒厳令が解除され、1992年に刑法100条の言論による反乱罪も撤廃されてから、表現の自由が得られたのである。実際にその時期からは、日本語による自伝や伝記の出版が一気に噴出した。例えば柯旗化、吳月娥、蔡德本、蔡焜燁、洪坤山、鄭春河、楊千鶴、林彥卿といったような、文学者でもない彼らは平凡であれ非凡であれ、日本語で自分の人生の歩んだ道を記録に残そうとした。また本稿で取り上げてきた素人の詩人たちも同じ心境にある。そうでなければ、「やれ日本人やれ中国人に翻弄され」、また「一世紀も口を縫われし」という表現はしないのである。彼らにとってのポストコロニアルは、二重の植民後の時期であることを認識する必要がある。

一方、1945年以後に台湾で始まったアンチ/脱日本植民地化の主体は大陸から渡ってきた政権によって担われてきた。その中で日本は侵略者であり、敵国であった。彼らは日本に対する痛ましい体験を訴え、それを癒すことだけに固執してきた。その中で現れている彼らの日本観はあくまでも「侵略される側」であり、一方台湾にいた人々の持つ「植民される側」の日本観と、本質的に違うものである。また台湾社会にもうひとつの植民政策を加えたことに対して、今日に至ってもその支配の正統性を主張しており、全面的な反省はみられない。現実的に未だに台湾ではこのような二つの日本観が葛藤し続けている。

日本語をもって一生涯著作活動を行いつつ、日本の土を踏んだことのない黃靈芝が、「あなたたち台湾人が日本語で著作するのは、ならば日本文学の範疇に属するべきなのか？それともやはり台湾文学の範疇に属するのか？」という質問に対し、次のように回答している。

私はインド人の書いた英文詩は英國の文芸なりや、と問い合わせる。私個人としてはフランス製の絵具を用いた梅原龍三郎氏の絵をフランス美術だとは思わないし、ロッキード社から飛行機を買い入れた日本自衛隊がアメリカ軍になるとも思えない。工具に本質を左右するほどの能力があるとは思えないからである。²¹⁾

このように語った彼は、自己のアイデンティティを揺るぎがたく台湾人であることに置いている。また近年になって呼ばれている「日本語人」の名称に対する思いは、次のような歌から察することができる。

われ曾て日本人たりし日本びいきと今は言はれて台湾の日本語人

(文錫煙, 孤蓬萬里 1997: 312)

日本語族と呼ばれる身にてひたすらに歴史の証を歌に詠むなり

(黃得龍, 孤蓬萬里編 1995: 377)

日本語人と言はれ沁み来るコンプレックス辞典に唐詩を頻り繙く

(王進益, 孤蓬萬里 1997: 275)

寿司を食み演歌を唄ひ台湾に残ん少なき「えせ日本人」

(王進益, 孤蓬萬里 1997: 274)

彼らにとっては「日本語人」や「日本語族」とは外部に言われ、呼ばれるものであり、彼ら自身の追求するものではないように思える。また彼らの作品の中で大量に使われている名称は、「台湾人」そのものである。そのような「植民される側」にとってのポストコロニアルの心境を真に理解するには、彼らの書いた作品に接近していくしかないのではないだろうか。

特殊な歴史条件によって、今日の台湾のエスニックグループ関係は、錯綜している。これらの歴史の脈絡の中で、植民主義は作用関係の主軸であり、かつエスニックグループが台湾島の上で出くわす歴史のうねりを導いている。だが、それぞれの植民主義が去るごと検討される人文社会史研究において、「被植民

者」の角度から出発したものは決して多くない。これは今日の台湾の社会の性質を明確化させることを難しくさせている。

台湾のポストコロニアル現象と状況はもはや複雑なものになっており、かつ曲折している。上述の三つの日本語詩歌サークルを分析した際に、その世代性および社会性、文化性の意義が見出される。世代性についていふと、台北歌壇の成員は平均年齢が78歳に達し、最年長者の現役詩人、張嘉英は1911年生まれ、最も若い詩人の楊瑞麟は1935年生まれである。つまり彼らは現在の70歳以上の世代を代表しており、日本統治集団、及びポストコロニアル期の台灣社会の種々の変遷を経験した世代であり、歴史の時代の活きた証人であると言えよう。社会性から言えば、多元的な民族の子孫から構成された戦後台湾社会において彼らは、「教育資本」の観点から日本植民時代社会における新興階級に属する者たちといえる。彼らの言動や身振りの中には、日本との親近性が含まれており、個人の事業、家庭、人際関係にも影響をもたらしている。さらに文化性からみるならば、彼らの造詣は、日本文化の精髓を理解するものであるため、高い芸術価値の詩歌作品を作り出せることができる。その詩歌内容を見れば、ほとんどは身の回りの台湾の日常文化を詠んでいる。そのような作品から示されているのは、日本文化と台湾文化の間を往来することができるということである。この二つの要素は、あい重複し、融合し、作品の中に入りこんでおり、日本、台湾の文化の混溶体の代表型態の一つとなっている。彼らの世代が残した貴重な経験は、我々に学問上の価値だけでなく、これから日本と台湾のお付き合いのありかたを考える上でも大きな財産となろう²²⁾。

注

- 1) 孤蓬万里（編著）1994：2。大岡信が寄せた序文において名付けたのが最初らしい。
- 2) 若林正丈が最も積極的に使っている。若林正丈1997a:80, 1997bを参照。台湾に来て彼らの存在を指摘したのは司馬遼太郎1994、また鈴木満男2001にも記述がみられるが、「日本語人」という言葉を使わなかった。丸川哲史2000は日本語世代と呼んでいる。自称としては、孤蓬万里1997:313に例がある。また楊瑞麟2002:16で

「日本語族」という呼称が見られる。

- 3) 近現代における日本語と日本人の関係については、イ・ヨンスク 1996, 酒直樹井 1996 を参照されたい。二書は日本での日本語の位相について分析が行われ、台湾の日本語人は時代や空間も違い、分析対象となっていない。
- 4) 劉益昌 1996: 30-67 を参照。
- 5) 台北盆地の開墾が文献に最初に現れるのは 1709 年で、陳頤章という人が清の官庁に台北盆地の西側、つまり淡水河、新店渓、大漢渓流域沿岸の土地を開墾したことが文献に見える。陳三井編 1982 を参照。
- 6) 全て英語によって教育が行われる学校や先住民専用の学校があった。
- 7) 台北市の日本植民地時代の建物や都市空間について、又吉盛清 1996 の優れた論著を参照されたい。
- 8) 1915 年、台北州庁が設置され、基隆、桃園、宜蘭まで管轄していた。
- 9) 田中一二 1931, 台北市役所 1939 を参照。
- 10) 山間部の先住民族地域「蕃地」には蕃童教育所が設けられた。台中だけは、一中が台灣人、二中では日本学生が主であった。
- 11) 台北市の戸籍登録によれば 1949 年に急に人口 10 万人も増え、1951 年の人口数は 56 万人であった。陳三井（編）1982: 335。しかし、この数字は難民の数を入れていない。
- 12) ここで述べている中華商場や日本人墓地の違法建築は 90 年代末になって地下鉄や公園を建設するため、ようやく撤去されるようになった。
- 13) 黃靈芝 2000: 138 より引用。
- 14) 孤蓬萬里 1994: 56 を参照。
- 15) この日本語小説集の出版は、研究者岡崎郁子氏の力によるものは大きい。著者が日本人あるいは外国人（台灣人）であるかどうかがすぐに分からぬよう「国江春菁」というペニームが用いられている。国江春菁 2002, また岡崎 2002 を参照されたい。
- 16) 黃靈芝 2000: 138 より。
- 17) 黃靈芝 2000: 23-25, 1980 年《台北俳句會》第 9 巻に最初に掲載される。
- 18) 黃智慧 2001 参照。
- 19) 夏鑄九 2001 参照。
- 20) 陳光興 1996 参照。
- 21) 黃靈芝 2000: 227-228 より引用。原文は 1998 年《台北俳句會》25 卷。
- 22) 本文中の『俳句集』、『句会』、『会報』、『台北歌壇』とは台北俳句会、台北川柳会、台北歌壇の会報を指す。拙稿を作成するに当たり、台北俳句会、台北川柳会、台北歌壇のみなさんにたいへんお世話になった。ここで厚くお礼を申し上げたい。

参考文献

イ・ヨンスク

1996 『「国語」という思想 近代日本の言語認識』、東京：岩波書店。

岡崎郁子

2002 『戦後台湾の日本語文芸研究——黄靈芝を中心として』岡山大学文化科学研究所
博士学位論文。

柯旗化

1992 『台湾監獄島』、東京：イースト・プレス。

夏铸九（本田・轡田訳）

2001 「殖民地近代性の構築」、『現代思想』01年5月号。

国江春青（岡崎郁子編）

2002 『宋王之印』、東京：慶友社。

黃英哲

1999 『台湾文化再構築 1945～1947 の光と影』、埼玉県：創土社。

洪坤山

2001 『闘病の日々』、台北：南天書局。

黃智慧（Huang, Chih Huei）

2001 “The Yamatodamashi of the Takasago Volunteers of Taiwan: A Reading of the Postcolonial Situation.” in Harumi Befu and Sylvie Guichard-Anguis eds., *Globalizing Japan: Ethnography of the Japanese Presence in Asia, Europe, and America*, pp. 222-250. London: Routledge.

2003 “The Transformation of Taiwanese Attitudes Toward Japan in the Post-colonial Period.” in Narangoa Li and Robert Cribb eds., *Imperial Japan and National Identities in Asia*, pp. 307-326. London and N. Y.: Routledge Curzon.

黄靈芝

2000 『黄靈芝作品集』卷18、自費出版。

2001 『黄靈芝作品集』卷19、自費出版。

孤蓬万里（編著）

1994 『台湾万葉集』、東京：集英社。

1995 『台湾万葉集（続編）』、東京：集英社。

孤蓬万里

1994 『「台湾万葉集」物語』、東京：岩波書店。

1997 『孤蓬万里半世紀』、東京：集英社。

吳月娥

1999 『ある台湾人女性の自分史』、東京：芙蓉書房。

吳濁流

1972 『夜明け前の台湾』、東京：社会思想社。

蔡惠萍

2000 『龍應台当官』, 台北: 聯經。

蔡焜熾

2000 『台灣人と日本精神』, 東京: 日本教文社。

蔡采秀

1996 「從日治到戰後的臺北」, 『臺灣史研究』, 3(2): 5-50。

蔡德本

1994 『台灣のいもっ子』, 東京: 集英社。

酒井直樹

1996 『死産される日本語・日本人』, 東京: 新曜社。

佐藤源治

1943 『台灣教育の進展』, 台北: 台湾出版文化。

司馬遼太郎

1996 [1994] 『台灣紀行』, 東京: 朝日新聞社。

ジョン・ダワー (三浦陽一・高杉忠明 訳)

2001 『敗北を抱きしめて』, 東京: 岩波書店。

鈴木満男

2001 『日本人は台湾で何をしたのか』, 東京: 国書刊行会。

台北歌壇編輯委員会

2001 『台北歌壇』, 台北: 台北歌壇編輯委員会。

臺北市役所 (編)

1985 [1939] 『臺北市十年誌』, 臺北市: 成文。

台北俳句集編輯委員会

1998 『台北俳句集』28, 台北: 台北俳句集編輯委員会。

田中一二 (編)

1931 『臺北市史』, 臺北市: 臺灣通信社。

張嘉英

2002 『愛の細道』, 自費出版。

陳光興 (坂元ひろ子 訳)

1996 「帝国の眼差し」, 『思想』859。

陳三井 (総編)

1982 『台北市發展史』, 台北: 台北市文献委員会。

鶴見 E. Patricia Tsurumi (林正芳 訳)

1999 『日治時期台灣教育史』, 宜蘭市: 仰山文教基金会。

鄭春河

1998 『台灣人 元志願兵と大東亜戦争』, 東京: 展軒社。

又吉盛清

- 1996 『台湾 近い昔の旅 〈台北編〉』、東京：凱風社。
- 松澤員子
- 1999 「日本の台湾支配と原住民の日本語教育」、栗本英世、井野瀬久美恵（編）『植民地経験』、東京：人文書院、pp. 526-345。
- 丸川哲史
- 2000 『台湾、ポストコロニアルの身体』28、東京：青土社。
- 森 宣雄
- 2001 『台湾 日本 連鎖するコロニアリズム』、東京：インパクト出版会。
- 森栗茂一（編）
- 1993 『都市人の発見』、東京：木耳社。
- 楊瑞麟
- 2002 「同じ顔同じ言葉」、台北俳句会・（社）日本伝統俳句協会『第2回 日本・台湾国際交流俳句会』、東京：朝日海外企画会社、p. 16。
- 楊千鶴
- 1998 『人生のプリズム』、台北市：南天書局。
- 賴柏紋
- 1997 『茜雲の街』、自費出版。
- 劉益昌
- 1996 『台灣的史前文化與遺址』、南投：台灣省文献委員會。
- 林彦卿
- 2002 『非情山地』、自費出版。
- 若林正丈
- 1997a 「現代台湾の日本像」、山内昌之、古田元夫（編）『日本イメージの交錯』、pp. 70-86、東京：東京大学出版会。
- 1997b 『台湾の台湾語人・中国語人・日本語人』、東京：朝日新聞社。

(^{コウ}^{チエイ} 黄 智慧・台湾 中央研究院民族学研究所)

アジア都市文化学の可能性
◎大阪市立大学文学研究科叢書 第1巻◎

2003年3月20日 初版発行

編 者 大阪市立大学大学院文学研究科
アジア都市文化学教室編
橋爪紳也 責任編集
発行者 前田博雄
発行所 清文堂出版株式会社
〒542-0082 大阪市中央区島之内2-8-5
電話06-6211-6265 FAX06-6211-6492
振替00950-6-6238

印刷：株式会社太洋社 製本：倉橋製本株式会社
ISBN4-7924-0535-1 C0025